

テレビの災害報道にみる映像と言説の関係性
—福島第一原発1号機爆発報道を事例に— (2017)
Relationship between Images and Discourses in TV Disaster
Coverage : A Case Study of Explosion Report of Fukushima Daiichi
Nuclear Power Plant Unit 1 (2017)

◎矢内 真理子¹
Mariko YANAI

¹同志社大学大学院社会学研究科メディア学専攻
Doshisha University Graduate School of Social Studies, Media Studies

要旨…本研究は、福島第一原発1号機の爆発報道初報の言説構造を検証することを通して、テレビ映像がニュースにおいて、放送の内容とどのような関係性を持っているのかを明らかにすることを目的とする。研究方法は、ジョン・フィスクが用いたフォーコーの系譜学的アプローチを用いた。
キーワード 福島第一原子力発電所事故、テレビ、在京メディアと地方メディア、災害報道、ジョン・フィスク

1. 問題意識と研究の目的

本研究の問題意識は、災害報道において映像が果たす役割について再考することである。従来、災害報道におけるテレビ映像の果たす役割が、さまざまな分野で注目されてきた。東日本大震災では津波の映像を繰り返し見ることによって視聴者が心理的なストレスを受ける可能性が問題視され、2012年2月29日に日本医師会が津波の映像を自粛するよう民放連などに申し入れをした¹。研究の分野においても、テレビ報道の受け手側のストレスに関する研究として「災害報道の心理的影響」と題した北村(2012)の研究がある。他にも船木(2008)は災害報道におけるテレビ映像には「動画の視覚効果が与える迫真性²」があると述べた。加えて、福田(2012)はテレビの災害報道における負の側面として「「絵になる」事態がニュースになりやすい³」と指摘している。さらには、より感動的な映像を撮るために被災者の生活やプライバシーに立ち入った取材方法についても問題視されてきた。災害報道におけるテレビ番組の構成において、映像はそれほど重要なのだろうか。

本研究の目的は、日本のテレビにおける福島第一原子力発電所1号機爆発報道を事例として、原子力災害発生直後の報道番組の言説構造を検証することを通して、テレビ映像がニュースにおいて、放送の内容とどのような関係性を持っているのかを明らかにすることである。研究方法としては、J・フィスク(1989=1998)が用いたフォーコーの系譜学的アプローチを援用し、テレビ映像が災害報道において、スタジオの進行内容とどのような関係性を持っているのかを明らかにすることを通して、災害報道におけるテレビ映像の果たす役割を検証する。本研究で用いるフィスクのアプローチは、ニュース分析のために用いられてきたものの、テレビにおける災害報道番組を分析するために構築されたものではなかった。本研究では、フィスクの番組分析の枠組みを日本の災害報道番組分析に援用することを通して、フィスクのアプローチが災害報道の分野でもどの程度援用可能であるかを検証したい。

2011年3月12日に発生した1号機の爆発の瞬間をとらえた映像は、福島中央テレビ(以下FCT、日本テレビ系列)が撮影したものが唯一であり、その希少性ゆえにこの映像には「公共財」として社会で共有を⁴(水島 2012)すべきという評価もなされている。1号機爆発を報じる際に、爆発の瞬間を捉えた映像を使った日本テレビ系列のテレビ報道と、爆発の瞬間の映像を捉えら

¹朝日新聞 2012年3月1日朝刊「津波の映像自粛申し入れへ 日医、NHKなどに」(アクセス日 2016年8月8日)

²船木伸江(2008)「第II部序章 災害報道とテレビ」、三枝博行ほか『災害報道—阪神・淡路大震災の教訓から—』見洋書房, pp60

³福田充(2012)『大震災とメディア—東日本大震災と教訓』北樹出版, p39

⁴水島宏明「福島第一原発の爆発映像 “公共財”として社会で共有を」『Journalism』2012年7月号, p52

れなかった他局と比較した場合、どのような差異があったのだろうか。テレビ番組において映像は一要素にすぎないため、番組の構成全体の中で映像がどんな位置づけにあるかを検証する必要がある。この視点から、1号機爆発における日本のテレビ番組報道の実態を検証する。

本論文の構成は、まず先行研究の検討・批判を踏まえて本研究の位置づけを明らかにする。続いてフィスクの系譜学的アプローチを分析枠組みとして、日本テレビ系列を中心に災害報道番組の分析を行う。最後に本分析で得られた知見から、従来のジャーナリズムの規範理論とは違った角度である映像分析に即した点から、災害報道番組のありかたについて提言する。

2. 研究対象と研究方法

研究対象はNHKとTBS（ジャパンニュースネットワーク、JNN）、日本テレビ（ニッポンニュースネットワーク、NNN）の3局における、原発1号機が水素爆発を起こした3月12日15時36分以降の初報である。時間的な範囲は原発事故の1号機爆発時の初報時から枝野幸男官房長官⁵の記者会見の中継が始まる17時46分までである。3局ともに同じ時間から中継を始めたため、この期間とした。当時は特別報道体制となっており、各局ともに24時間体制で東日本大震災に関するニュースを放送した。NNNは唯一1号機の爆発の瞬間をとらえた映像の撮影に成功した局である。本研究では、NNNの1号機爆発報道を日本の公共放送であるNHK、民放の放送局としてTBS系列の報道を比較対象として分析する。

研究方法は、フィスクがニュース番組の分析で用いた「系譜学的アプローチ」を用いる。フィスクは『抵抗と快樂』において、グラムシの歴史学的アプローチとフーコーの系譜学的アプローチを比較しながらニュース番組の構造を分析した。フィスクによれば、歴史学的アプローチとは「デキゴトの起源を同定」し、デキゴトを「一貫した物語にまとめあげる」ことであるという。あるひとつのストーリーを作り、そのストーリーにそぐわないもの、適合しないものは真実とはみなさない。一方、系譜学的アプローチでは、「デキゴトの独自性を認め、起源も多様なら相互の関連性も多様で、各デキゴトの間には断絶と矛盾があることを認め」⁶、分析対象にする。言い換えれば、デキゴトには偶然があること、必ずしも個々のデキゴトに因果関係があるとは限らないこと、デキゴトがめいめいばらばらに存在していることを認めることが系譜学的アプローチの根幹である。フィスクはニュースの作り方が歴史学的であるとし、しかしながら「ニュースの内部にはデキゴト間の矛盾や非連続性が消えることなく残って」⁷いて、ニュースは歴史を描こうとしているにもかかわらず、デキゴトが抵抗をしていると指摘する。番組というひとつのストーリーを創ろうとしても、どうしてもストーリーからデキゴトがはみ出ることもありうるし、ストーリーとしてのちぐはぐさに見た者の違和感を払拭することはできない場合がある。ニュースが歴史を描く言説構造の方法として、言説にヒエラルキーを設定するというものがある。フィスクによればニュースにおいては、ニューススタジオの言説や主張が最も価値があり、スタジオの外の中継はその下に位置付けられ、さらに現場をおさえた映像などはもっとヒエラルキーが下であるという⁸。スタジオのキャスターは真実の代弁者であり、映像はスタジオの語る事実の証言者という位置づけであるとされる。これらの系譜学的アプローチを理論的枠組みとして1号機爆発報道の言説の構造を明らかにする。

フィスクや彼が用いたフーコーについては多くの批判や議論がある。本研究でフィスクの方法論を用いる理由は、今回の目的である災害報道番組における映像の役割を明らかにするには、映像やテロップ、スタジオの発言内容がかみ合っているかどうかを見る必要がある。ゆえに、本研究ではフィスクのいう系譜学的アプローチを援用する。方法としては、放送中のスタジオの発言内容、テロップ（どのような表現が用いられるか）、原発の外観を捉えた映像を使用しているか（映像の出所、動画か静止画像か、爆発の瞬間の映像を用いたか）を記述し、それぞれがどのように変化していくか、映像とテロップがどのような発言内容の中で用いられるかを検証する。番組データは録画機器のシステム上、1時間ごとのファイルになっている。発言内容については筆者が文字起こしし、テキスト化した。映像を再生したのはwindows10の映画&テレビというアプリを使っており、そのカウンターを基準に時刻や分数を割り出しているため、数秒の誤差がある。

3. 分析結果

⁵本研究では、肩書はすべて当時のものを用いる。

⁶John Fiske(1989-1998)Reading the popular, Routledge. (ジョン・フィスク著、山本雄二訳『抵抗の快樂 ポピュラーカルチャーの記号論』世界思想社) p231

⁷同上, p231

⁸同上, p232

⁹同上, p233

¹⁰同上, pp235-236

まずNNN系列について述べる。一連の報道で登場するのは、登場順にFCTのアナウンサー、NNNの男性アナウンサー、女性アナウンサー（共に17時30分で別のアナウンサーに交代する）、専門家の4人である。映像に関しては、NNN系列で用いられた映像は1種類（図2）のみだった。この映像は繰り返し用いられており、研究対象の時間内で数えたところ43回にのぼった。発言内容においては第一報のFCTでは「水蒸気と思われるものが福島第一原発からボンッと吹き出し」としていたが、その直後のNNNのスタジオでは専門家が「意図的なもの」と解説した。しかしその後の17時16分の東京電力を情報源とした新情報が入った際には専門家は「水蒸気爆発の可能性もまったく否定できないわけじゃないと思います」とまた異なった説明をした。これはすべて同じ映像に対する意味づけである。また、17時15分ごろの最新情報では「爆発音」と「爆発」が混在して用いられているが、特にその後修正や謝罪などは行われなかった。

テロップでは「まもなく保安院会見 福島第一原発で爆発音」（NNN、17時16分）などといった表現が用いられた。その中で、17時17分から1回、「福島第一原発 復旧作業中に爆発」と画面左下にテロップを出したが、その後「福島第一原発で爆発音 4人がケガ」など、また「爆発音」という表現に戻った。

NHKの初報は16時52分である。その後枝野官房長官の会見が始まるまで、すべて原発関連の報道を行った。また、この時間中、地元局との中継はなく、すべて東京のスタジオで行われた。出演者は男性アナウンサー（17時で別のアナウンサーに交代）、科学文化部の記者、専門家の3人である。NHKの放送内容の大きな特徴としては、映像の解説と地元の人への呼びかけが挙げられる。NHKは（1）14時の映像、（2）16時40分の映像、（3）16時30分過ぎの映像、（4）午前中の映像、（5）（3）の画面下部3分の1に（4）を足したもの、（6）画面を上下に2分割して（4）と（3）を比較した静止画、（7）（6）の下部の1号機の骨組みが映っている部分に白い○をつけて強調した静止画、（8）（6）の1号機の部分を拡大した静止画、（9）（8）の下部に○をつけて強調した静止画の9種類を使用した。NHKは、映像の解説のために、初めは事故前と事故後の映像を交互に映していたが、その後画面を上下2分割し、爆発前と後の比較をしており（図3）、さらに1号機の部分に○を入れ、ももとの映像を拡大するなどして加工し、なるべく事故の様子がわかるような配慮をしたと言える。それが9種類の映像の多さにつながっていると考えられる。しかし、ももとの映像が不明瞭な点もあり、視覚的には何が起きているのかをつかみづらいものになっている。テロップでは「福島第一原発 1号機のあたりで爆発音」（17時00分）、「福島第一原発 爆発音 4人がケガ」（17時36分）など、「爆発音」という表記を用いた。

JNN系列の初報は16時54分だった。JNNはスタジオに男性キャスター、女性キャスター、専門家など7人の出演者があった。東京のJNN報道カメラから、女性アナウンサーが「ここで新しい情報が入ってきました。東京電力によりますと、午後3時30分ごろ、福島第一原発1号機で、ドーンという爆発音が聞こえたということです。3時40分に白い煙が確認されました。原因は不明だということです。」（テロップ 「速報 福島第一原発で爆発音」）と報じたのが第一報である。

17時5分ごろに系列局であるテレビユー福島（TUF）との中継があった。TUFでは「爆発音」、「爆発のようなもの」と報じた。JNNは、（1）陸上自衛隊提供の11日夜の空撮映像、（2）11日地震直後の映像、（3）11日午後の海側からの映像、（4）12日午前の海側からの映像、（5）富岡情報カメラでの中継の5種類を用いて伝えた。しかし、映像について解説することはなかった。アナウンサーによる最新情報の他には、キャスターと専門家による現時点での状況の推測と解説のほか、原発建設時の安全性の議論に関する話題（16時59分ごろ）や、過去に原発事故の事例であるJCO臨界事故を挙げて、原子炉を冷却するためにどういった方法をとるべきか、事故の復旧にはどういった方策をとることができるか（17時42分ごろ）といった、直接避難にかかわる話題よりも周辺的な話題が展開された。

4. 映像とスタジオの進行の関係性

NNNとJNN、そしてNHKを比較すると、最も初報が早かった局はNNN（16時49分）である。それにNHK（16時52分）とJNN（16時54分）が続いた。この点に関してはNNNが他局と異なる部分である。だが内容的な問題に踏み込むと、爆発と断定したかについては、発言内容の中ではJNN系列では「爆発音」、地元局のTUFの中継時には「爆発音」と「爆発のようなもの」という表現を使って報じた。NHKは「爆発音」以外にも「あくまでも仮定ですが」「爆発が起きたとみられ」、など、「爆発」という言葉を用いるが他の言葉を併用し断定を避けたり、「骨組みのような」「建物の外壁がなくなっているように見えます」などの「爆発」以外の表現を用いたりして1号機の様子を説明した。テロップでは「爆発音」の表記が用いられ、発言内容においても、テロップにおいても、両局共に断定しない報道をしたといえる。NNNでは17時16分ごろのアナウンサーが読み上げた最新情報では「福島第一原発第一号機で、復旧作業中に直下型の大きな揺れがあり、ドーンという爆発音が聞こえ白煙が上がったということです。（中略）この爆発で、東京電力の社員2人と作業員2人の合わせて4人がけがをしたということです。（中

略) この爆発の原因など、詳しいことはまだわかっていません」とアナウンサーが読み上げ、「爆発音」と「爆発」が混在する表現をした。最初のセンテンスが「爆発音」という表現で、そのあとの文章で「爆発」と表現されることや、このニュースとはほぼ同じタイミングでテロップでも「福島第一原発 復旧作業中に爆発」と表示されたが、その後再び「爆発音」の表記に戻ったことから、やはり爆発と断定しない報道であるといえよう。よって、爆発と断定したかについては3局とも似た傾向にある。

最も重要な点として指摘できるのは、NNN系列では地元局であるFCTの初報時（16時49分）では「水蒸気と思われるものが福島第一原発からボンッと吹き出しました」と報じていたが、その後の東京のスタジオでは「意図的な作業」（16時52分ごろ）と専門家が発言し、東京のアナウンサーたちもその解釈を受け入れる場面である。さらに先述の17時16分過ぎのニュースが入った際にさらに専門家が「さっきは私は違うと言いましたけれども水蒸気爆発の可能性もまったく否定できないわけじゃないと思います」と述べ、異なった説明がなされた。ここで言えることは2点あり、第一に同じ映像に対して意味づけが3回も変わっている。これをフィスクの言う言説ヒエラルキーに照らし合わせるならば、NNNのスタジオこそが言説構成の頂点にあり、その次点にFCTの中継があり、最も下層に原発の爆発映像があるということが言える。無理矢理にNNNの作り出す規律とストーリーにFCTの中継と爆発映像を従わせようとしたものの、そのちぐはぐさが露呈したのがこの意味づけの変化なのである。

第二に、在京メディアと地方メディアの問題としてもこの流れを捉えることができるという点である。地元福島からの情報と専門家の言う内容が異なっているが、それに対して矛盾が指摘されることもなく、結果として福島からの内容を否定する流れとなっている。フィスクが提示する枠組みとしては、スタジオが主で映像と外部からのレポートは従の関係にあるとしているが、中央（東京）が主で地方が従であるという今回のパターンはフィスクが言及できなかった災害報道への枠組みであると考えられる。

最後にテロップは映像要素の一つである。だが今回のケースでは、内容がアナウンサーやキャスターの話す内容に合わせて表示されることが多く（NNN、17時30分以降など）、外見的には視覚的要素であるが内容的にはより音声的要素に近いものであると考えられる。水島（2009）はテロップを「言語的・映像」と分類している¹⁾。テロップはフィスクのいう枠組みの中ではどこに位置付けることができるのか、これもフィスクが言及できなかった部分であるといえる。そして誰がテロップをつけるのか（今回の場合はNNNなのか、それともFCTなのか）によっても位置づけが変わってくると考えられるため、今後の検討が必要な部分である。

参考文献

- 1) 池田謙一(2015)『震災から見える情報メディアとネットワーク』東洋経済新聞社
- 2) 伊藤守(2012)『テレビは原発事故をどう伝えたのか』平凡社, pp.107-113
- 3) 遠藤薫(2012)『メディアは大震災・原発事故をどう語ったか』東京電機大学出版局
- 4) 大井眞二(2013)「東日本大震災とニュースメディア—社会的危機としての大震災—」『大震災・原発とメディアの役割—報道・論調の検証と展望—』新聞通信調査会, pp.111-192
- 5) 北村秀明, 橘輝, 新藤雅延, 染矢俊幸(2012)「災害報道の心理的影響:東日本大震災の津波映像を見て突然想起された被災体験例から」『臨床精神医学』41巻9号, アークメディア pp.1241-1246
- 6) 木村幹夫(2012)「東日本大震災時にメディアが果たした役割」『情報の科学と技術62』社団法人情報科学技術協会, p.378-384
- 7) 坂田邦子, 三村泰一編(2016)『被災地から考える3・11とテレビ』サンパウロ
- 8) 丹羽美之, 藤田真文編(2013)『メディアが震えた—テレビ・ラジオと東日本大震災』東京大学出版会
- 9) 沼田宗純, 目黒公郎(2013)「東日本大震災後のゴールデンタイムのテレビ報道の分析」『生産研究66』東京大学生産技術研究所, pp.373-377

¹⁾水島久光(2009)「『笑い』と『涙』の生産と流通——情報バラエティの感情経済学——」『プロセスが見えるメディア分析入門——コンテンツから日常を問い直す』, 藤田真文, 岡井崇之編, 世界思想社 p.44